

目 録

摘 要.....	I
Abstract.....	II
第1章 序 論.....	3
1.1 研究目的.....	3
1.2 先行研究と研究の必要性.....	3
1.3 研究方法.....	4
第2章 禁忌、言語禁忌の概念.....	5
2.1 禁忌の定義と由来.....	5
2.2 言語禁忌の定義と属性.....	7
第3章 中国の言語禁忌.....	8
3.1 言語禁忌の種類.....	9
3.1.1 婚姻、出産と言語禁忌.....	9
3.1.2 名前と言語禁忌.....	11
3.1.3 病気と言語禁忌.....	12
3.1.4 死亡と言語禁忌.....	13
3.1.5 祝日節句と言語禁忌.....	14
3.1.6 職業と言語禁忌.....	15
3.1.7 性、生理現象と言語禁忌.....	16
3.1.8 数字と言語禁忌.....	17
3.1.9 伝統観念と言語禁忌.....	18
3.2 禁忌語の形式—忌避の基本法.....	18
第4章 日本の言語禁忌.....	19
4.1 言語禁忌の種類.....	21
4.1.1 婚約・結婚式.....	21
4.1.2 入学・入社・栄転.....	21
4.1.3 開店・開業.....	22

4.1.4	懐妊・出産.....	22
4.1.5	新築.....	22
4.1.6	長寿.....	22
4.1.7	数字（厄年）.....	23
4.1.8	受験の励まし.....	23
4.1.9	お悔やみやお見舞い.....	23
4.1.10	山言葉・沖言葉・正月言葉.....	23
4.2	禁忌語の形式.....	24
第5章	韓国の言語禁忌.....	24
5.1	言語禁忌の種類.....	25
5.1.1	体に関するもの.....	25
5.1.2	動物に関するもの.....	26
5.1.3	死に関するもの.....	26
5.1.4	名前に関するもの.....	27
5.1.5	数字に関するもの.....	27
5.1.6	性、生理現象に関するもの.....	27
5.1.7	その他の禁忌.....	29
5.2	禁忌語の形式.....	29
5.2.1	単純的形式変形.....	29
5.2.2	代替変形.....	30
第6章	中国、日本、韓国三国の言語禁忌の比較.....	32
6.1	禁忌語の発生原因.....	32
6.1.1	心理的要因.....	32
6.1.2	言語及び社会的要因.....	33
6.2	禁忌語の対象と形式.....	34
6.3	中・日・韓の禁忌文化の相違点.....	35
第七章	結 論.....	37
	参 考 文 献.....	40

第1章 序論

1.1 研究目的

言語はその言語を使う人の文化と集団心理を表す。¹人間は言語を創造したが、人間の生活は言語の支配と制約を受ける。言語は思想、感情、意図を表す手段であり、人間関係を結ぶ媒体であり、人間社会の文化発展の基本的要素である。言語と文化の関係についての研究を言語文化論という。このような言語文化についての研究は言語人類学的観点から言語と文化の関連性を取り扱うが、禁忌語も研究対象の範囲に属している。我々の日常生活を分析してみると、社会習慣的原因、信仰的・俗信的原因によって、特殊な場合に特殊な言語或いは文字の使用を忌避し、それに該当する他の特定の言語或いは文字を使用することが見られる。このように、使用を忌避する言語又は文字を禁忌語（又は忌み言葉）と呼ぶ。²社会的、宗教的事実によって、各国の禁忌の発生原因、程度には差があるが、至る所に禁忌風俗が存在しているのである。拙論では、言語学的視覚で禁忌語の類型、実現形式を分析して、社会、文化、民俗、生活に大幅な影響を与える禁忌語を通じて中国、日本、韓国の禁忌文化を考察するのに、その目的がある。

1.2 先行研究と研究の必要性

禁忌に対する研究はヨーロッパの民俗学的観点から始まったが、それらの諸般研究成果はまた言語学の研究にも影響を与えたのである。禁忌語は長い間、精神的に人々の生活に深く浸透して、直接的または間接的に支配力を発揮してきたから、禁忌語は主に民俗学或いは文化人類学の研究対象として、取り扱われてきたのである。³したがって、言語学的観点で禁忌語についての再検討が必ず必要であると思われるようになった。

禁忌語についての研究は他の語彙分野に比べると、比較的に遅れているのが現状である。次に中国、日本、韓国において、禁忌語についての研究がどのように行われていたかを見てみよう。

中国において、今日に至るまで、禁忌語に関する研究はそれほど活発には行われていな

¹ 허재영 [금기어의 구조 및 발생 요인]

² 문효근 [한국의 금기어]

³ 신희삼 [금기어의 양상과 의미론적 해석]

かったのである。しかも、今まで行われた研究も禁忌語について、言語学的観点からの研究ではなく、禁忌風俗とか民俗文化に注目したものが多かった。

李中生(1991)は《中国語言避諱習俗》で、中国の禁忌語の由来、発展過程、類型について論じた。

日本において、禁忌語はタブーとかマナーとされて、待遇表現とか婉曲表現とされてきたから、禁忌語をカテゴリーとした学術文献はほとんど収集することができなかった。

韓国において、禁忌語についての既存の論議は本当の意味の言語学的観点から研究されたのではなく、民俗学的観点で行われていたから、言語禁忌だけでなく、行動禁忌も忌み言葉の範疇に入れるのが実情であった。このような研究傾向は、禁忌語に関する正しい理解を妨げる原因になる恐れがある。今まで、行われた禁忌語についての研究状況は次のとおりである。

김성배(1975)の《한국의 금기어·길조어》, 문효근(1962)の《한국의 금기어》では、全国の禁忌語を調査し、分類した。残念なことに、二つとも行動禁忌を研究対象としたものである。

심재기(1970)の《금기 및 금기담의 의미론적 고찰》では、禁忌語を禁忌談に呼び換え、その意味の特性を分析した。

このような先行研究が行われたにもかかわらず、近年における、禁忌語についての研究論文はその量がごく限られており(特に比較研究論文は見つけることができない)、まだまだ体系を形成するまでに至っていないのが現状である。

1.3 研究方法

異なる言語の相互関係を研究するには大きく二つの方法に分けられる。⁴一つは比較言語学で、これは同じ系統に属する諸言語の間の音韻対応法則を見出し、文法の共通点・相違点を考察し、共通の祖語の再建と言語発展過程を明らかにするのである。もう一つは対比言語学で、幾つかの言語の言語の部分的体系(音韻・形態・統語・語彙・文字など)を比較・対照し、諸言語の間の異同を明らかにするものである。

言語構造のみを研究目的にしたChomskyの言語学に比べて、社会言語学は、言語と社会・文化の関係を研究対象とする。言語は社会を離れて存在することができない。したがって、社会活動としての言語行為について純粋な言語学的研究と社会言語学のような他の

⁴ 许余龙 [对比语言学]

言語学的方法を並行しなければならない。

拙論は、対比言語学と社会言語学の視覚から禁忌語を分析しようとする。先ず、禁忌・禁忌語の概念を整理し、次に中国・日本・韓国において禁忌語の形式、発生原因を分析し、最後に禁忌語の発生原因、形式についての比較を通して、中・日・韓三国の禁忌文化を考察しようとする。

第2章 禁忌、言語禁忌の概念

2.1 禁忌の定義と由来

1. 禁忌の定義

禁忌は人類が普遍的に所有している文化現象である。英語でタブーは禁忌の意味で「タブー」(Taboo)という語はもともと形容詞で、文字的には「区分しておいた」の意味である。これはポリネシア語から来た語で、人間であり動物であり、禁忌に触れたら危険が生じるから触れたらだめだということの意味する。

1777年、クック (Captain.J.Cook.1728-1779) は初めて「タブー」という言葉が使われていることを発見したのである。クックは「タブーは包括的意味を含んでいるが、一般的に接触不可の全ての物事に適用し、ある事物に触れるなということの意味する」と説明している。⁵

禁忌とは何か？

まず、言語的禁忌の概念を理解するため、「禁忌」に対する辞典の定義を引用してみる。

中国語：禁忌：(1)忌讳,避忌的事物

(2)谓因摄养而避免食用某种食品或药品

(3)指禁令戒条⁶

日本語：禁忌：(1)日時、方位、行為、言葉などについて、さわりあるもの、忌むべきものとして禁ずること。また、そのもの。

(2)タブーのこと。

(3)医薬品、食品などで、病状を悪化させ、または治療の目的にそぐわないもの。⁷

⁵ “타부” [기독교 대백과사전 15권] 240 再引用

⁶ 汉语大词典第七卷 P923

⁷ 広辞苑 第五版

韓国語 : 금기: 명사. (1)꺼리어서 피함.

(2)치료약,치료방법이 목적에 맞지 아니하거나 부적절하다고 생각되는 증상,증후, 상태⁸

心理学者Freudは禁忌について次のように定義づけている。「タブー（禁忌）は二つの意味がある。一つは崇高なもの（こと）、神聖なもの（こと）の意味であり、もう一つは神秘、危険、禁忌、不潔の意味である。．．．即ち、タブーとは制限あるいは禁忌されて触ってはいけない性質をもったものの存在である」⁹と指摘している。禁忌の対象から見ると、それは一種の特殊事項で、二つの面の内容を含んでいる。一、尊敬される神物は勝手に使ってはいけない。こんな神物は「神聖」、「清潔」な性質をもっているので、勝手に言及したり、使用したりすることは、その神聖感を貶すことで、一種の神聖を冒瀆する行為である。もしこんな禁忌を破ったら、不幸を招く。反対にこんな禁忌を守ったら、平安と幸福をもたらす。二、軽蔑される賤しいもの、危険なものは勝手に触ってはいけない。こんな禁忌を破ったら、不幸を招く。したがって人間はいつも言行に注意し、万事慎重を期し、与えられた枠やルールを絶対に越えないのである。

2. 禁忌の由来

世界に対する人間の認識はごく皮相的であり、有限である。日常生活、各業種には人を困惑させる何かのものが存在していて、こんなものは神秘感・神聖感、恐怖感を引き起こし、禁忌も自然に生じる。したがって、人間は生まれてから、世間という禁忌で満ちた網に落ちるのである。

禁忌の産生はいろんな社会的な原因がある。その中で、非常に重要な原因は社会生産力がごく低い状況で、人々は大自然の威力に震え上がらせたことである。すべての狂風、豪雨、稲妻、雷、山火事、猛獣などの現象に対して、恐れおののいながら災害の降臨を心配したのである。そのときの人間は、非常に受動的な適応方式をとることしかできなくて、主動的な征服方式をとることは不可能なことであったので、人に危険をもたらしたり、命取りをする自然現象に対して、非常に本能的に恐怖感を感じるのである。こんなに打ち負かすことのできない險悪で、恐ろしい自然力量の前で、人間は大部分回避の方法をとる。

こんな原始的で、立ち遅れている、自然に依頼性が強い生産方式、生産力水準は原始的造神運動を招いた。この造神運動は禁忌の原因の一つである。

禁忌形成のもう一つの原因は、人々が長い間の真理探求の過程において獲得した生活経験、知恵である。この盲目的な探求過程の中で人々は、時には偶然に成功し、時にはきわ

⁸국어대사전 P513

⁹ 「凶騰と禁忌」の第二章「禁忌と矛盾情感」

めて大きい損失を受けたのである。それで、人々はこんな偶然を必然と錯覚して、失敗を招いた方法を教訓にして禁忌方式に決めたのである。

禁忌事項の中の一部は人々の生活経験、教訓或いは自然力に対する崇拝や恐れによってできたのではなく、宗教に対する敬慕によってできたのである。宗教の教義と禁忌は宣教者が宣教するとき、信徒らが自覚的に守らせるものであって、これらの宗教規定は民間に伝えて、民間の禁忌習俗になったのである。

他に縁起の悪いことは避け、縁起のいいものを望む心理から、縁起の悪いものが害を引き起こすことを恐れ、言及しないようになったのである。

2.2 言語禁忌の定義と属性

1. 言語禁忌の定義

禁忌の内容は多種多様である。例えば、生理禁忌、婚姻禁忌、出産及び育児禁忌、生活禁忌、業種禁忌、宗教禁忌、社交禁忌、節句禁忌、鬼神禁忌、などである。しかし、禁忌の表現方式は二つにすぎない。行為禁忌と言語禁忌である。

行為禁忌は、人の動作、行為に対する禁忌である。すなわち、人々があることをするのを禁止するということである。

言語禁忌は、人の言語行為に対する禁忌である。すなわち、人々があることを言うのを禁止するということである。言語禁忌は行為禁忌の補充形式である。

言語は人間の最も重要な交際手段であり、思考のみならず、思想を表現する手段である。だけでなく、言語は風俗と精神文化の一部である。言語学者は、言語は一種の符号であり、語義と必然な関係を持っていないと主張する。しかし、人間は第二信号系統機能をもっている高等な動物なので、連想を通して、言語とその言語が代表する実際内容の間に実質的な連係を発生させる。例えば、中国には「画餅充飢」、「望梅止渴」という典故があるが、全部言語の形がその言語が代表する実物と同じ効力を発した例である。人々は、普通、言語がある魔力を持っていると信じている。それで、言語という符号とその符号が代表する真実な内容の間には完全に同一の反応関係が存在していると確信しているのである。

上述した理由で、人々は言語禁忌を行為禁忌の延長、補充だと見なし、禁忌すべき行為、また禁忌すべきものができたとき、言語上でも忌避するのである。これがいわば「言語禁忌」（禁忌語）である。言語禁忌は一種の普遍的な民俗現象で、個々人から全社会に至るまで、どこでも、いつでも存在するものである。

2. 言語禁忌の属性

属性からいうと、言語禁忌は禁忌民俗の特殊な事項であって、民俗文化学の範疇に属している。言語禁忌は行為禁忌の延長と補充であるが、行為禁忌と相違点がある。行為禁忌の対象は動作、行為であるが、言語禁忌の対象は人の言語である。人々は普通意味が接近している他の言葉を通して、禁句を言わない目的に達する。したがって、言語禁忌に関する学問は語義学の一部であると主張する説と修辞学に属すると主張する説がある。故に、言語禁忌は学際学科に属するもので、決して一学科に属する学問ではないと思われる。

1) 言語禁忌は広範性と地域性をもっている。

言語禁忌が流行した範囲からみると、触れていないところがない。例えば、「死」、「病気」、「不潔なもの」に対して大部分の民族はほぼ同一な禁忌をもっている。したがって、言語禁忌も同じか接近している。しかし、言語禁忌はかなり顕著な地域性をもっている。言語禁忌の対象と手段は言語であり、しかも、言語はもともと地域性をもつからである。中国は言語禁忌の地域性と方言の分布がわりに一致している。同一方言区の人々の社会文化特徴は一致するからである。しかし、一旦、方言区から外れたら、方言と文化特徴の違いによって、言語禁忌の民俗も違う。

2) 言語禁忌は時代性をもっている。

ある言語禁忌の風俗がある歴史時代には存在したが、次の時代には消失してしまうケースも少なくない。これは古代の名前の禁忌でよく見られる。

3) 言語禁忌は階層性と集団性をもっている。

昔の時代で、等級観念は非常に強烈であった。言語は社会構成員全体の公共の手段であるが、禁忌語に言い換える言葉としては階層性をもつ。例えば、同じ「死」でも、階層が違うことによって、「死」に対する呼び方も違うのである。

言語禁忌は集団性ももっている。人間社会は、政治または経済地位、文化教養の違いによって、違う社会集団を形成する。したがって、所属した社会集団によって、使う言語禁忌にも差異が存在する。

第3章 中国の言語禁忌

中国の禁忌文化は長い間発展、変化し、禁忌文化の系統は歴史の流れの中で人間と順調な関係を維持してきた。

中国で禁忌が発生したのは「殷商」の時代で、春秋戦国時代から禁忌は「礼」の中に属するものになった。婚姻、家庭に関する禁忌は「円満」と「和」を重視する中国人の文化心

理を反映する。動物に関する禁忌は中国人が神を人格化する神霊風俗を反映する。吉を求め、凶悪を避けるのも中華民族に広く浸透された伝統である。自分の病について婉曲な表現を使うのは、表に表さない文化心理状態を反映する。死に関する禁忌は中国人の生死観、人生観を覗くことができる。性に関する禁忌は生殖崇拜観、儒教の影響を受けて優雅な表現を表出した。恥に対する禁忌は鬼神迷信と関係がなく、純粹な礼儀風俗で、これは中国人の「メンズ」を重んじる風俗からきたものである。次にこのような禁忌が言語でどのように表現されるかについて考察してみよう。

3.1 言語禁忌の種類

3.1.1 婚姻、出産と言語禁忌

人間は生まれてから、世間という禁忌で満ちた網に落ちたのである。周辺の世界に対して了解が不足だったため、人々は人生を伴っていく幸福と災難の出所を知らなかった。したがって、いつも思わぬ災難が訪れないかとひやひやしていた。婚姻、出産は人生のキーポイントである。一方では、伝統的な中国人の観念で結婚は出産のためである。もし、このことに問題が出たら、血統が絶えるからである。他方では、中国人は家庭を重視する観念が強いから、夫婦の離婚、家庭の破綻はその人の社会的評価の際の主な指数にもなる。また、昔の中国で婚姻は父母が主宰したから、人生悲劇の序曲であった。こんな婚姻、出産は家庭不和や婚姻悲劇の種にもなりうるから、人々は神秘感と恐怖感を感じるのである。それで、自分がその悲劇の主人公になるのではないかとひやひやしながら、全てにわたって注意したのである。各種の禁忌もこのように生じた。次に、現代に至って、相変わらず、流行している言語禁忌と禁忌風俗を紹介しようとする。

出産に関するもの：

1. 広東潮汕地区の田舎では、1月15日（元宵節）になると、ちょうちんを揚げ、色絹を飾りつける。その中では、ちょうちんを揚げない村も一つか二つあるが、そのとき、ちょうちんを観賞するひとは絶対に「ある村は今年燈がない」と言うてはいけない。「燈」は「丁」と同音で、この村の子孫が死に絶えることを呪うことになるからである。
2. 黒龍江、吉林、遼寧、北京では「子孫鯉鯉を食べる」風俗がある。結婚するとき、半熟の餃子を新婦に食べさせる。新婦が餃子を食べるとき、来賓らが「生不生呀?」と聞く。この時、新婦は「生」と答えるべきで、「不生」と答えては絶対にいけない。「生」はここ

で二つの意味がある。新婦が「生」と答えたら、将来新婦は無事出産できるという意味になる。

3. 河南の鄭州、開封一帯には、子供が生まれると、子供の父親が義理の親戚関係を結ぶために、子供の生まれたその翌日の朝、早く出かける風俗があるが、勿論望ましいのは「刘」、「程」姓に出会うことである。「刘」は「留」、「程」は「成」と発音が同じであるからである。一番嫌がる姓は「王」、「史」である。「王」は「亡」、「史」は「死」に発音が似ているからである。

4. 杭州では子供が生まれて百日目になると、「百日」と言うのを忌んで、「百禄」という。「百日」は、その地方で、人が死んでからの百日をさすからである。しかし、「百禄」というのも書面に限ることで、会話では用いない。当地の方言で、「百禄」は「不禄」と発音が同じだが、「不禄」は「死」の意味である。したがって、「禄」という字の代わりに、「羅」という字を使う。

5. 民間には又こんな風俗がある。妊婦の前で、「填圈」、「糊窓」のような話をしてはいけない。産婦が母乳を失うことを恐れるからである。

方言とは関係なしに、殆どの地域で人々は子供の持病についていうのを忌む。子供の前で、「この子は体がいいから、病気にかかったことが一度もない。」のような話をしてはいけない。もし病魔に聞かれたら、どうしても子供を病気にかからせなければならないように注意を与えることになるからである。その他に、子供の太り具合についていうのも禁忌する。

婚姻に関するもの：

もし、生育に関する禁忌が不妊、子孫が絶える、出産の不順、子供の不健康を忌む言葉であるとしたら、婚姻に関する禁忌は家庭破綻を恐れるような内容に表現される。例えば：

1. 台湾の山地の男女は恋愛するとき、傘、扇子を携帯するのを忌み、鏡をあげるのも禁忌する。婚姻、恋愛がうまくいけないことをのみ恐れる表現である。中国語で「傘」は「散」と同音で、「扇」は「吹了」、「冷了」の意味を含んでおり、鏡は「破裂」を意味する。そのため、「扇子」を「開合」、「豎笠」という地域もある。

2. 陝西の留壩県一帯では、男女が恋愛するとき、「蒜苗」（ニンニクの芽）を送らない。「蒜」は「算」と同音だからである。「算」は関係の中断を意味する。

3. 北方では結婚などお祝いの日には、「梨」を食べない。更に、梨を二等分したり、いくつかに分けて人に配るのを忌む。「梨」は「離」と同音で、「分梨」は「分離」になるからである。

4. 潮汕地区では、結婚披露宴のとき、皿を積み重ねるのを忌む。これは「重」の禁忌で、女性の再婚を避けようとするところから出たものである。
5. 家庭の破綻だけでなく、夫婦の一方が先に亡くなることも恐れることから、また一種の禁忌ができた。例えば、台湾の閩南語方言地区では、こんな風俗が流行する。男女が結婚した後、花嫁の「姑婆、姑母、小姑」は、新婚夫婦の部屋に入ることを忌む。「姑」は「孤児」、「孤独」、「孤立無援」の「孤」と同音だからである。

3.1.2 名前と言語禁忌

人の名前はその人を代表する符号である。符号と人は本来特別な必然性がなかった。しかし、鬼神文化の影響を受けた関係で、人々は名前を身体の一部だと思って、生命力を賦与する。もし随意に人の名前を言い出したり、この人の名前にいんちきをやったりして人を誑かすと、人を死なせることもできる。これが「呪」の原理である。

上述した原因で、中国人は名前を人の生死存亡、隆盛、衰微と大きな関係をもっているものだと見なし、社会禁忌の範囲に入れた。それで、命名、名字に関するいろんな禁忌ができたのである。

1. 名付けは字義を重んじる。

字義を重んじるのは中国人が名前を付けるときの伝統習俗である。子供が生まれると、親は多くの漢字の中で、一つか二つかの字義のいい漢字を選んで名をつける。こんな字義は二方面の内容を含んでいる。一つは、名前の本意、即ち実際の意味で、子供に対する希望、追求、願い、または子供の特徴、愛好などが含まれる。もう一つは、名前の寓意、即ち別のものを借りて本意を寄託することで、命名者の心がけも含まれている。

字義の悪い語、例えば「邪悪」、「貪婪」、「凶残」、「悪毒」、「淫邪」、「奸詐」などはもちろん名前に使わない。それから、やぼったい語も名前に使わない。例えば、「菜花」、「翠姑」、「有財」、「富貴」などはやぼったい感じを与える。名前をつけるとき、姓と名の組合にも気をつけなければならないのである。例えば、「白如冰」という名前では、「白」は特別な意味がないが、「如冰」と結合させると、「高潔如冰」の意味になっていい名前になるのである。反対に「来喜」、「来发」と言う名は嬉しいこと、金持ちになろうとすることを願う名前だが、もしこの家の姓が「杜」だったら、何も要らないという意味になる。

2. 字の音を重んじる

字音は字の発音である。名前をつけるときは、当然下品な物事が連想できる同音の字を

避けようとするのである。例えば、「春」と「蠢」、「珠」と「猪」などである。したがって、見たところでは意味がよくて、上品な名前が、耳で聞くときは、意味が変化する場合がある。例を挙げると、「刘官才」という名前は「棺材」に、「朱石」は「猪屎」に、「王甫」は「亡父」に聞こえることができるのである。

3.1.3 病気と言語禁忌

病気は医学が発達しなかった昔の時代には怖いものであった。「死」と「不具」につながるものだからである。そのため、「病」は「死」と一緒に言語禁忌の範囲に属したのである。次に「病」に関する禁忌語を見てみよう。

重病は「沉疴」、「沉痼」という。「沉」は「重」で、「疴」、「痼」はその自体が重病である。重病は重病であるが、上品な言葉で表現ことによって、恐怖感を減らすのである。

病が重くて治癒の希望がない場合には「不斟」または「易箒」という。「不斟」はもう食物が食べられないという意味で、「易箒」は寝床を変えるという意味で、もうすぐこの世を離れることを象徴する。軽い病は「微恙」、「小恙」という。「恙」は軽い病気の意味である。病気にかかると、「染恙」という。

チフスは「冻天行」というが、もしかしたらチフスは大分、冬に流行する理由から出た言葉かもしれない。下痢は「拉肚子」といい、「流产」は「小产」という。「粉刺」は今「青春痘」というとてもモダンな別称がつけられた。「跛足」は「弱足」、「腿不方便」といい、「耳聋」は「耳背」、「重听」、「背听」、「耳朵不好使」といい、「眼瞎」は「眼睛不好使」、「看不到」という。「跛」、「拐」、「瘸」、「聋」、「瞎」のような忌憚のない言い方は避ける。

病のほか医者に治療を頼み、薬を飲むことも忌みはばかる。例えば、「看病」を「看医生」、「问先生」という。広東では漢方薬を「凉」或いは「凉茶」といい、潮汕では「凉水」という。江西一带と客家地区では漢方薬を飲むのを「吃好茶」、「吃茶」といい、潮汕では「食厚茶」といい、湖北長陽一带では「喝细茶」という。薬を煎じる鍋を広州の人は「茶煲」といい、潮汕の人は「凉水锅」という。

病で入院したり、家で休養している人を病気見舞いするときもいろんな禁忌がある。例えば、見舞いをするとき、「剑兰」（花の一種）をもっていかない。「剑兰」は「见难」と発音が似ているから、縁起が悪いと思われるのである。天津では、見舞いをするとき、「梨」を送らない。「梨」は「离」と同音で、離散を連想させるからである。上海人はり

んごを送るのを忌む。上海方言で「苹果」と「病故」は発音が似ているからである。

3.1.4 死亡と言語禁忌

生・老・病・死は本来自然の摂理である。しかし、およそ人間は此の世の人生の幸せを欲しがり、彼の世の死を怖がるものである。中国には「好死不如赖活」という話があるが、ちょうど生に対する追求と死に対する恐怖を反映する諺である。死に対する恐怖感から、「死」という字に対して禁忌の心理が生まれ、「死」でない別の言葉で表現していたのである。

「礼記・曲礼下」では次のように述べている。庶民の死は「死」という。天子の死は「崩」という。即ち山崩れで天子地位の重要性を比喩する。諸侯の死は「薨」、大臣の死は「卒」、普通の官員（士）の死は「不禄」という。「禄」は「俸禄」（給料）のことで、「不禄」はもう給料をもらわないということである。古代の人は「死」だけでなく「不在」、「出去」などの婉曲表現さえ忌みはばかり。古代で、帝王から庶民に至るまで「死」を忌みはばかった。それで、舌を巻くほど豊富多彩な「死」という禁忌語を代替する言葉ができたのである。古書には「死」に関する名称が100種をも超えて載せている。次に一々羅列して見ようと思う次第である。

辞世・没世・过世・弃世・下世・谢世・厌代・就世・就木・就义・就命・毕命・溘谢・溘逝・撤席・弃堂帐・捐馆舍・捐馆・捐背・见背・弃背・弃养・弃损・启手足・启体・幽沦・沉沦・物故・物化・游岱宗・殒身・殒命・殒灭・殒没・大夜・大归・百岁・瞑目・合眼・终天年・天年・不讳・奠楹・风化・化去・亡逝・亡故・亡过・亡化・宾天・骑箕尾・解驾・仙去・仙化・仙逝・仙游・上仙・骑鲸・骑鹤化・奄化・隐化・遁化・顺化・迁化・迁行・迁神・示灭・入灭・灭度・圆寂・禅寂・顺寂・归寂・舍寿・蝉蜕・桶底脱・谢宾客・回首・入黄泉・身归泉世・老了・睡长觉・放了命・倒了头・了帐・停床・咽气・十生九了・早世・短世・短折・不顺・昏札・拔着短筹

このほかにも「浮轻」、「永蛰」、「长眠」、「长住」、「长终」、「长逝」、「亡歿」、「遗亏」、「仙升」、「上天」、「归真」、「归西」、「作古」、「捐躯」などがある。だれも古代の「死」に関する名称を完全に収集することができない。

では、現代で「死」に対する禁忌語はどのようなものがあるかについて見てみよう。

現代人も古代人と同じく、あらゆる方法を講じて「死」という字を避けようとする。したがって、現代にも「死」という禁忌語を言わないためにいろんな言葉ができたのである。

正義のために献身した人、評価のいい人の死に対して直接「死」という字を使わないで、

称揚する語で代替する。これは死者の親族に直接、刺激にならないだけでなく、死者についての無限な哀悼の意を表することができるからである。例えば、「犠牲」、「献身」、「殉国」、「殉職」、「光荣」、「就义」、「与世长辞」、「寿终正寝」、「巨星陨落」などである。この他、「去世」、「合眼」、「永别」、「不在了」、「离开人间」、「三长两短」、「命归黄泉」のような言い方もよく使われているのである。特殊原因の「死」も特殊な言い方がある。例えば、「寻短见」、「寻短路」、「自尽」、「自刎」は自分が求めた「死」を代替する語である。

「死」という字だけでなく、死に関する事物に対しても忌みはばかる。ひいては「死」を連想させる字にも触れてはいけない。例えば、死と密接な関係がある棺おけについても「寿板」、「寿器」、「长生」などいろんな表現がある。人が死んだ後、着る服は「寿衣」というのである。

3.1.5 祝日節句と言語禁忌

祝日節句の言語禁忌は祝日の間、自分の言行を慎むことである。人々はこんな祝日のときは神霊も下界に下りると思うから、供え物を用意して祖先、神仏を迎えるだけでなく、言行にも格別注意しながら、神仏を怒らせることをのみ恐れる。こんな心理は言語交際に反映される。「病」、「死」、「鬼」、「杀」、「穷」、「输」、「亏本」など、縁起の悪いことばは忌避する。

南京一帯では、祝日のとき、「死鱼」、「死鸭」のような言葉は避けて、「文鱼」、「文鸭」という。「火」は「红火」、「火旺」の意味で、縁起がいいから、天津一帯では、柴を売る人にあつたとき、買いたくなかったら「已有」といい、「不要」といわない。

「柴」は「財」と同音になるので、「不要柴」は「不要财」になるからである。東北の大部分のところでは、大晦日或いは正月にお皿などを打ち砕くと、「破了」、「碎了」と言うのを禁忌し、「岁岁(碎碎)平安」、「越打越发」という。広東の潮汕地区では、「罐开嘴、大富贵」で「破」、「碎」を代替する。天津一帯では、祝祭日に「殺」という字を口に出すのを禁忌から、「杀鸡、杀鸭」と言わないで、「伏鸡、伏鸭」といい、広東の人は「用鸡、用鸭」という。天津の人は正月に塩を買うことを禁忌する。「咸」は「闲」と同音になるからである。餃子を作るときは、「馅不够」、「皮漏了」、「皮破了」などのことを言っただけではいけないし、作り終わったときは「完了」といってはいけない。中身が残ったときは、「有余」、「留着再包吧」と言うべきで、餃子を包むときは、餃子皮が破れたら、「挣了」というべきである。食事をするとき、ご飯のお代わりをする場合には「还

「要飯」といわず、「添不添飯」という。「要飯」は「讨飯」と同義であるからである。食べ終わったときは「吃完了」、「吃光了」などの表現は憚り、「吃好了」、「吃饱了」というのである。

3.1.6 職業と言語禁忌

職業言語禁忌は人々がある仕事に従事するときに神仏の憎みを買って自分の利益に損害を受けることを恐れて、自分の言行を慎むことである。中国は昔から、「36行」、「72行」、「360行」の説がある。職業の特徴が異なることによって、崇拝する神も異なり、人に与える危険も異なる。したがって、禁忌の内容も大きな差がある。

1. 漁家の「彩話」

海に依頼して生活する漁民にとって、海は生計の営み場でもあり、命の落とし穴でもあって、ほんの少しの不注意でも災難に遭うことができるのである。

海のこんな恐ろしい一面は人に恐怖感を引き起こせて、人々が自分の理解によって、この主宰者を想像し、形作らせたのである。それで、海には神ができ、妖怪もできた。したがって、いろんな禁忌も自然的に生まれたのである。こんな禁忌の言葉を形を変えて他の言葉で表現したのが「彩話」である。

漁家が一番忌みはばかる言葉は命と関係があるものである。例えば、「沉」、「翻」、「溺」、「散」、「碰礁」などである。湖南一帯の漁民は「盛飯」を「添飯」、「洗澡」を「筛凉」、「倒水」を「清水」という。湖南方言で「盛」は「沉」と同音になるからである。「洗」、「倒」などの縁起の悪い言葉は言うまでもなく禁忌するのである。

船に乗った場合には、格別、言葉に気をつけなければならないのである。「傘」は「撑花」、「到岸」は「拢岸」、「箸」は「筷子」と言うべきである。「傘」は「散」の諧音で、「到」は「倒」、「箸」は「住」と同音だからである。魚を食べる時も片方を食べきって、もう一方を食べるときは「翻过来」と言わず、「顺过来」と言うべきである。船に乗った場合には、船の主人に対して「老板」と呼ぶことを憚り、「船老大」或いは「掌柜的」と呼ぶべきである。「老板」は船の甲板が古いという意味になるから、縁起が悪い言葉になるのである。

2. 商業場所での縁起の良い言葉

「商场如战场」と言う言葉がある。ビジネスをする人はみんな金持ちになることを望み、元手をするのを避けようとする。それで、それに関するいろんな禁忌もできた。

昔、商業に従事する人は「关门」は「倒闭」と同じ意味になるから、「关门」という言

葉を禁忌したのである。それで「打烊」と言う言葉ができたのである。

豚の舌の「舌」という字は北京方言では「折」と同音になるので、「口条」という。粵方言地区では、「蝕」と同音になるので、「捌」という。温州では「猪口赚」といい、南昌では、「招财」といい、蘇州では「门枪」というのである。

豚の肝の「肝」という字は水分のない「干」と同音なので、広州では、「润」というのである。それを「猪捌」とあわせていうと、「利潤」になるのである。また、粵方言地区で「丝瓜」を「胜瓜」という。「丝」は「輸」と同音になるからである。広州の人は「苦瓜」を「凉瓜」というのである。

上述した生計の道を妨げる言葉だけでなく、縁起の悪い言葉も禁忌の範囲に属するのである。例えば、薬屋、棺おけ屋の経営者は言葉に非常に注意しなければならない。「再来坐」、「欢迎再来」などの話は絶対にしてはいけない。「再得病」、「再死人」と呪う感じがするからである。

3. 自然を畏敬する

自然力と自然物に対して理解することのできない古代人は、宇宙は神秘的な超自然的力で満ちていると思って、宇宙の万物は全てが「靈性」を持っていると思った。こんな思想から、人々は神、自然物、動物植物などに対して崇拝するようになった。したがって、こんな崇拝から崇拝物はいろんな禁忌を持つようになる。この中で一番重要化されるのが崇拝物の名前を口に出すのを禁忌することである。こんな原始的言語禁忌は現代生活にも残された。

動物に関するもの：東北長白山一帯では、「虎」を「山君」、「山神爷」と呼ぶ。東北の鄂温克族は「熊」を「老爷子」と呼ぶ。安徽一帯では、狐を神に敬う風俗があるから、「狐」を「仙姑」、「花老太」と呼ぶ。唐の時代、「鲤」は皇帝の姓「李」と同音であったから、「鲤鱼」を「赤鲜公」と呼んだのである。昔の劇団では「老鼠」を「灰八爷」、「刺猬」を「白五爷」、「蛇」を「柳七爷」、「黄鼠狼」を「黄大爷」、「狐狸」を「大仙爷」と呼んだのである。この五つの動物を五大仙と称したからである。

自然物に関するもの：赫哲族人は火を「火神爷」という。

3.1.7 性、生理現象と言語禁忌

儒教文化及び「性の排他性」などの原因により、中国は昔から「性」を汚い、恥ずかしいものに扱ったのである。それで、「性」、「性的器官」、「性的行為」について直接言及するのを憚り、婉曲で優雅な言葉で表現してきたのである。